



新潮新書

Brevity is the soul of wit,
and tediousness the limbs and outward flourishes.

養老孟司

YORO Takeshi

バカの壁

新潮社
003

養老孟司 1937(昭和12)年神奈川県鎌倉市生まれ。62年東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。95年東京大学医学部教授を退官し、現在北里大学教授、東京大学名誉教授。著書に『唯脳論』『人間科学』など。

◎ 新潮新書

003

かべ
バカの壁

著者 養老孟司
ようろうたけし

2003年4月10日 発行

2003年8月30日 21刷

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71番地

編集部 (03)3266-5430 読者係 (03)3266-5111

<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Takeshi Yoro 2003, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが
小社読者係宛お送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-610003-7 C0210

価格はカバーに表示してあります。

新潮新書

養老孟司

YORO Takeshi

バカの壁

003

新潮社

まえがき

これは私の話を、新潮社の編集部の人たちが文章化してくれた本です。対談や講演を文章化するのは、よくやることです。でも独白を続けて、それを文章にしてもらったのは、じつはこれがはじめてです。話している間は、なんとなく警察の取調べを受けているような感じもしましたが、内容はたしかに自分が話したことです。それを他人に文章化してもらうと、こうなるのか、とあらためて思いました。自分の文章ともいえるし、他人の文章のようでもある。これが奇妙な効果を生じているように感じます。いってみれば、この本は私にとって一種の実験なのです。

題名の「バカの壁」は、私が最初に書いた本である『形を読む』（培風館）からとったものです。二十年も前に書いた本ですから、そのときははいぶん極端な表現だと思わ

れたようです。結局われわれは、自分の脳に入ることしか理解できない。つまり学問が最終的に突き当たる壁は、自分の脳だ。そういうつもりで述べたことです。

若い頃に、家庭教師で数学を教えたことがあります。数学くらい、わかる、わからないがはっきりする学問はありません。わかる人にはわかるし、わからない人にはわからない。わかる人でも、あるところまで進むと、わからなくなります。もちろん一生をかければわかるかもしれないのですが、人生は限られています。だからどこかで理解を諦める。もちろんそうしない人は、専門の数学者になるでしょう。しかしそれでも、数学のすべてを理解するわけではない。それを考えれば、だれでも「バカの壁」という表現はわかるはずだと思っています。

あるていど歳をとれば、人にはわからないことがあると思うのは、当然のことです。しかし若いうちは可能性がありますから、自分にわからないかどうか、それがわからない。だからいろいろな悩むわけです。そのときに「バカの壁」はだれにでもあるのだということを思い出してもらえば、ひよっとすると気が楽になって、逆にわかるようになるかもしれません。そのわかり方は、世間の人が正解というのと、違うわかり方かもしれません。

ないけれど、もともと問題にはさまざまな解答があり得るのです。そうした複数の解を認める社会が考える住みよい社会です。でも多くの人は、反対に考えているようですね。ほとんどの人の意見が一致している社会がいい社会だ、と。

若い人もそうかもしれない。なぜなら試験に正解のない問題を出したりすると、怒るからです。人生でぶつかると問題に、そもそも正解なんてない。とりあえずの答えがあるだけです。私はそう思っています。でもいまの学校で学ぶと、一つの問題に正解が一つというのが当然になってしまいます。本当にそうか、よく考えてもらいたい。

この本の中身も、世間のいう正解とは違った解をいくつも挙げていると思います。でもこの本の中身のように考えながら、ともかく私は還暦を過ぎるまで生きてきました。だからそういう答えもあるのかと思っただければ、それで著者としては幸福です。もちろん皆さんの答えがまた私の答えとは違ったものであることを期待しているのです。

バカの壁
—
目次

第一章 「バカの壁」 とは何か

13

「話せばわかる」は大嘘 「わかっている」という怖さ 知識と常識は違う
現実とは何か N H Kは神か 科学の怪しさ 科学には反証が必要
確実なこととは何か

第二章 脳の中の係数

30

脳の中の入出力 脳内の一次方程式 虫と百円玉 無限大は原理主義
感情の係数 適応性は係数次第

第三章 「個性を伸ばせ」という欺瞞

41

共通了解と強制了解 個性ゆたかな精神病患者 マニユアル人間

「個性」を発揮すると 松井、イチロー、中田

第四章 万物流転、情報不変

52

私は私、ではない 自己の情報化 『平家物語』と『方丈記』 「君子豹変」は悪口か 「知る」と「死ぬ」 「朝に道を聞かば……」 武士に
二言はない ケニアの歌 共通意識のタイムラグ 個性より大切なも
の 意識と言葉 脳内の「リング活動」 theとaの違い 日本語
の定冠詞 神を考えるととき 脳内の自給自足 偶像の誕生 「超人」
の誕生 現代人プラスα

第五章 無意識・身体・共同体

87

「身体」を忘れた日本人 オウム真理教の身体 軍隊と身体 身体と
の付き合い方 身体と学習 文武両道 大人は不健康 脳の中の身
体 クビを切る 共同体の崩壊 機能主義と共同体 亡国の共同体

理想の共同体 人生の意味 苦痛の意味 忘れられた無意識 無意

識の発見 熟睡する学生 三分の一は無意識 左右バラバラ 「あ

べこべ」のツケ

第六章 バカの脳

125

賢い脳、バカな脳 記憶の達人 脳のモデル ニューラル・ネット

意外に鈍い脳の神経 方向判断の仕組み 暗算の仕組み イチローの

秘密 ピカソの秘密 脳の操作 キレる脳 衝動殺人犯と連続殺人

犯 犯罪者の脳を調べよ オタクの脳

第七章 教育の怪しさ

157

インチキ自然教育 でもしか先生 「退学」の本当の意味 俺を見習

え 東大のバカ学生 死体はなぜ隠される 身体を動かせ 育てに

くい子供 赤ん坊の脳調査

第八章 一元論を超えて

176

合理化の末路　カーストはワークシェアリング　オバサンは元気　欲
をどう抑制するのか　欲望としての兵器　経済の欲　実の経済　虚
の経済を切り捨てよ　神より人間　百姓の強さ　カトリックとプロテ
スタント　人生は家康型　人間の常識

第一章 「バカの壁」とは何か

「話せばわかる」は大嘘

「話してもわからない」ということを大学で痛感した例があります。イギリスのBBC放送が制作した、ある夫婦の妊娠から出産までを詳細に追ったドキュメンタリー番組を、北里大学薬学部 of 学生に見せた時のことです。

薬学部というのは、女子が六割強と、女子の方が多い。そういう場で、この番組の感想を学生に求めた結果が、非常に面白かった。男子学生と女子学生とで、はっきりと異なる反応が出たのです。

ビデオを見た女子学生のほとんどは「大変勉強になりました。新しい発見が沢山あり

ました」という感想でした。一方、それに対して、男子学生は皆一様に「こんなことは既に保健の授業で知っているようなことばかりだ」という答え。同じものを見ても正反対といってもよいくらいの違いが出てきたのです。

これは一体どういうことなのか。同じ大学の同じ学部ですから、少なくとも偏差値的な知的レベルに男女差は無い。だとしたら、どこからこの違いが生じるのか。その答えは、与えられた情報に対する姿勢の問題だ、ということです。要するに、男というものは、「出産」ということについて実感を持ちたくない。だから同じビデオを見ても、女子のような発見が出来なかった、むしろ積極的に発見をしようとしなかったということなのです。

つまり、自分が知りたくないことについては自主的に情報を遮断してしまっている。ここに壁が存在しています。これも一種の「バカの壁」です。

このエピソードは物の見事に人間のわがまま勝手さを示しています。同じビデオを一緒に見ても、男子は「全部知っている」と言い、女子はディテールまで見て「新しい発見をした」と言う。明らかに男子は、あえて細部に目をつぶって「そんなの知ってまし

たよ」と言っているだけなのです。

私たちが日頃、安易に「知っている」ということの実態は、実はそんな程度なのだということです。ビデオを見た際の男女の反応の差というのはかっこの例でしょう。

「わかってる」という怖さ

「常識」Ⅱ「コモンセンス」というのは、「物を知っている」つまり知識がある、というのではなく、「当たり前」のことを指す。ところが、その前提となる常識、当たり前のことについてのスタンスがずれているのに、「自分たちは知っている」と思ってしまうのが、そもそもの間違いなのです。この場合、それが男女の違いに顕著に現れた。

女の子はいずれ自分たちが出産することもあると思っているから、真剣に細部までビデオを見る。自分の身に置き換えてみれば、そこで登場する妊婦の痛みや喜びといった感情も伝わってくるでしょう。従って、様々なディテールにも興味が湧きます。一方で男たちは「そんなの知らんよ」という態度です。彼らにとっては、目の前の映像は、これまでの知識をなぞったものに過ぎない。本当は、色々と知らない場面、情報が詰まっ